

<3頁から続きます> 常に対話しながら自分とは異なる意見に耳を傾け、聖書から一つひとつ確認していく姿勢、固定化されたあり様に縛られずに、絶えず柔軟に変わり得る、このバプテスト教会ならではの営みこそ、スピードや効率や画一化を重視する現代におけるカウンターカルチャーとしてのキリストの福音を益々豊かに体現するものになっていくのだらうと思うのです。出会う人と共に教会も変わっていく可能性がある。私たちの群れに一人のキリスト者が加わることによって、私たちが知らなかった神さまの豊かさというものをさらに知ることができる。そのことは私たち自身の伝道の喜びにもつ

ながるでしょうし、教会を元気にしていくことになるでしょう。そして、そのような教会の働きに仕えることを喜びとする、新たな伝道者の誕生につながっていくのだと思います。

注1：この原稿は2015年1月24日開催「きたかん壮年会研修会」での講演記録を大幅に加筆・修正したものです。

注2：ここで言及した「式文」は、『バプテスト教会において豊かな式を形作る言葉と祈りのために——視点と参考例』として、2015年12月にCD-ROMと関連資料集を諸教会・伝道所宛に送付させていただきました。

全国の教会・伝道所の壮年の皆様へ(全国壮年会連合事務局長 井伊肇)

2016年1月現在 神学生奨学金献金・会費の納入状況と、納入促進・期限内納入のお願い

地方連合名	神学生奨学金献金					連合会費				
	2016/1実績		前年同月		対前年額	2016/1実績		前年同月		対前年額
	金額	教会	金額	教会		金額	教会数	金額	教会	
北海道	252,960	12	426,102	10	-173,142	85,500	7	42,000	5	43,500
東北	646,297	11	748,999	11	-102,702	75,000	9	82,500	10	-7,500
北関東	1,536,819	15	1,730,695	15	-193,876	162,000	11	208,500	12	-46,500
東京	2,521,049	29	2,550,888	29	-29,839	258,000	16	141,000	12	117,000
神奈川	1,142,005	11	1,599,282	13	-457,277	157,500	8	190,500	9	-33,000
西関東	367,950	8	419,354	7	-51,404	58,500	7	43,500	5	15,000
中部	484,030	7	710,932	9	-226,902	109,500	12	120,000	12	-10,500
関西	668,471	17	615,070	16	53,401	75,000	7	66,000	6	9,000
中四国	666,770	14	749,818	15	-83,048	63,000	8	54,000	8	9,000
北九州	658,500	11	680,436	12	-21,936	97,500	6	93,000	8	4,500
福岡	2,264,807	31	1,951,510	27	313,297	246,000	17	208,500	19	37,500
西九州	800,500	8	825,400	10	-24,900	42,000	4	25,500	5	16,500
南九州	635,893	15	798,322	17	-162,429	88,500	8	115,500	9	-27,000
個人団体等	590,842	-	1,017,680	-	-426,838	-	-	-	-	-
総計	13,236,893	189	14,824,488	191	-1,587,595	1,518,000	120	1,390,500	120	127,500

いつも全国壮年会連合の活動にご理解とご支援を感謝申し上げます。
2016年1月現在の「神学校献金(神学生奨学金献金)」と「壮年会連合会費」の状況をお知らせします。
ぜひ、お祈りに覚えてご協力ください。尚、期末に当たり、3月31日までに「ゆうちょ銀行」の所定口座に振り込まれたものを計上することとなります。期限の厳守にもご協力いただきたく、あわせてお願い申し上げます。

2016年(第51回)全国壮年大会 in 北九州 (ご案内)	
○開催日・場所	2016年8月19日(金) 西南女学院大学マロリーホール(19日) 2016年8月20日(土) バプテストシオン山キリスト教会(20日)
○大会主題	『連帯と祈り』 副題 ～協力伝道を通して、私たちが目指すもの～
○大会聖句	「こういうわけで、兄弟たち、神の憐れみによってあなたがたに勧めます。自分の体を神に喜ばれる聖なる生けるいけにえとして献げなさい。これこそ、あなたがたのなすべき礼拝です。」 ローマの信徒への手紙12:1(新共同訳)
○主題講師	田口昭典 牧師(金沢キリスト教会、日本バプテスト連盟理事長) 西南学院大学神学部神学専攻科卒業、1980年若松バプテスト教会牧師を16年間勤め1996年から金沢キリスト教会牧師赴任し現在に至る。 現在：日本バプテスト連盟理事長
○実行委員会	委員長：梅木芳昭(大分)、副委員長：吉田光慶(若松) 事務局長：菊岡義修(東八幡) 祈禱：石山輝久(東八幡)、広報宣伝：児玉 亮(若松) 会場：山下 保(シオン山)、プログラム：児玉尚文(荊田)、会計：中村 熙(若松) 顧問：藤田英彦(東八幡)、伊藤光雄(シオン山) 準備のためにお祈りください。

日本バプテスト連盟全国壮年会連合 〒336-0017 さいたま市南区南浦和1-2-4
事務局執務時間：月、水、金 10:00～16:00
☎fax:048-886-7533 http://www.sonen.net sonen@bapren.jp

伝道者養成&教会形成

全国壮年会連合 NEWS

第90号
2016年2月20日
発行

日本バプテスト連盟
全国壮年会連合
発行人：大城戸一彦
編集人：井伊肇
Topics password▶sorengo

「アレクサメノスは神を拝む」

奨学金委員 洋光台キリスト教会牧師 萩原永子



19世紀のローマで発見された遺跡に、一つの落書きがありました。1～2世紀のもので、宮廷に仕える者たちの寄宿学校跡地から出てきたとのこと。そこには、「十字架につけられたロバ」と、それを見上げる人が描かれ、絵に合わせて、「アレクサメノスは神を拝む」と書いてありました。落書きの解釈には諸説あります。ロバが愚か者の代名詞であることから、「寄宿学校の生徒でキリスト者のアレクサメノスを侮辱したものではないか」というのが、有力な説だそうです。

十字架につけられたキリストは、ある人たちにとっては愚かさの極みです。けれども、召された者にとって、キリストこそ神の力です。教会は、この「愚かだ」と侮られているキリストを信じ、キリストの体を形作っています。私たちが祈りに覚えている神学生たちは、そんなキリストの体なる教会に仕えるために学んでおられる方々です。

神は神学校において、万能で完璧な「伝道者候補」を育てているわけではありません(もとより、そんな伝道者自体がないのでしようが)。また、それ風に、そつなくこなせる要領の良い「伝道者候補」を育てているのでもありません。神は、時にスーパースターを求めたくなる人間の身勝手さを、笑い飛ばすようなことをなさいます。自分の信仰の弱さや足りなさに震え、委ねきれな

い、時には信じきれない脆さに嘆くような者たちをも支え、育て、福音を託して、伝道者として用いようとなるからです。

神学生たちの中には、机上の学びの中で、あるいは教会での具体的な出来事の中で、気持ちがぐじけたり、不安になったりする方もおられるでしょう。しかし神は、私たちに對してそうであるように、そのような者たち一人ひとりを養い、折々に信仰告白へと導いてくださる方です。傍目には、気の遠くなるような愚かな手段の時もあります。にもかかわらず、この愚かな手段を通して、伝道者が立てられ、用いられているところに、神の愛とユーモアがあふれています。

その上で神は、神学生を支える貴い働きを、私たち諸教会・伝道所に大切な課題として託しました。私たちはそれに応えて、自分たちの献身のかたちとして、祈りと献金とをもって取り組むよう召されています。神の、愚かで、気の遠くなるご計画の中で、私たち自身もまた、あわれみに富む神に用いられているのです。

冒頭の遺跡の話。落書きのそばには、別人による落書きで、次のように書かれたものが見つかっています。「アレクサメノスは誠実なり」。くだんの嘲りへの反論でしょう。書いたのはアレクサメノス本人でしょうか、それとも彼を支えている第三者でしょうか。私たちは、それぞれに置かれた場で、主から託された働きとして、誠実に神学生たちを支えて続けていきたいものです。

神学校献金(神学生奨学金献金)

郵便振替 00150-7-669605 日本バプテスト連盟 全国壮年会連合事務局

<事務局よりお願いとお知らせ>

- ◇ 2015年度神学校献金(神学生奨学金献金)および壮年会連合会費の振込は3月31日(木)までをお願いいたします。4月1日以降のお振り込みは2016年度の計上となります。ご協力お願い申し上げます。
- ◇ 壮年会連合ニュース第91号(4月発行予定)から、即応性が必要な記事をホームページ移行するなどして、紙面をA4版モノクロ両面として発行させていただきます。また、3頁に掲載していましたが特集記事は次の準備が整うまで休載とさせていただきます。ご理解のほどよろしくお願い申し上げます。

<神学生 証し>

西南学院大学神学部 選科3年 吉田尚志 (盛岡バプテスト教会推薦)



神学部での全課程修了を目前に控え、私は現在、神さまが自分を遣わしてくださる教会を祈り求めながら備えの日々を過ごしています。三年間に及ぶ全国諸教会の皆様からの祈りと支援が、私に尊い学びと出会いの一つひとつを与えてくださいました。

この場をお借りして心より感謝を申し上げます。

“私という欠けたる器の存在に一体何ができるのか？”神学部での歩みは、すでに入学時にはクリアしていたはずのこの問いの中で右往左往した日々と言ってもいいかもしれません。直面する様々な課題の度にいつも、自分の中にある迷いと不安と劣等感を、切り離すことのできない重荷として思わされずにはいられませんでした。しかし恩師T牧師のある言葉が、闇の中を貫く一筋の光のように、いつも私の心に希望を灯し続けてくれました。“与えられた献身の思いを強く持ち続けなさい”。神さまからの召しが、神さまの御心として、揺らぐことなく

私の中で固く立ち続けている。T牧師の言葉が、この神から与えられた“信頼の恵み”とも言うべき献身の思いに、諦めずに生き続けることへと押し出してくれたのです。私がここにいるのは“牧師として教会にお仕えす”ためであり、この“献身の思い”は、“神さまがくださった恵み”であるということに、何度も何度も立ち上がらせてくれる“希望の言葉”となったのです。

イエス・キリストを主と告白し、生きることへと召し出されたお一人おひとりには、その方に適った神さまからの“献身の思い”が与えられていると思うのです。それは“信頼の恵み”です。神さまからの召しに信頼して踏み出して行く時、私たち一人ひとは、希望をもって生かされていくと思うのです。そしてその姿こそ、紛れもなく“教会”であると思います。私は、出会いが与えられる教会のお一人おひとりと共に、神さまから与えられる“献身の思い”に互いの命を輝かせ合って、喜び、祈り、感謝して歩いていきたいと思っています。

<北海道地方連合壮年会の活動紹介>

北海道地方連合壮年会長 鈴木一弘 (旭川バプテスト教会)

北海道連合は16の教会で構成されています。昨年度から活動テーマを「奉仕する壮年会」として活動しています。

役員構成は次の通りです。

会長 鈴木一弘 (旭川教会)
副会長 原田恵雨 (苫小牧)
書記 藤原直之 (旭川東光)
会計 鈴木忠雄 (札幌)

活動として次の4項目に取り組んでいます。

- ① 「連合壮年会ニュース」を発行し活動の準備と報告を行う (年4号予定)
- ② 無牧師教会の支援を継続すること、無牧師ではなくても私たちの働きを必要とし希望してくれる教会のために働きたい
- ③ 各ブロック (道東・道央・道南) の諸教会のつながりがさらに豊かになるための方法を模索していく。
- ④ 連合の各会との連携で活動を広げる。『連合協力伝道週間』にあわせて道内の壮年が祈りと賜物を持ちより一つの教会に仕える。

今年度は特別伝道集会のサポートで、9月にはリビングホープ教会にてチラシ配りを行い、その後、教会で1泊させて頂き、教会員の方々と交わりの時を持ち、2日目の主日礼拝では壮年会の役員が証しをさせて頂きました、現在無牧師の教会ですのでこれからも招聘の祈りが必要です。

小樽教会では10月に特別伝道集会のチラシ配りを行い、その後、教会員の皆様と懇談の時をもちました。

この2つの応援を通して、壮年同士の交わり・語らいの場が欲しいと思うようになりました。

北海道の壮年はここ10年程、一堂に会する事が4月の総会時のみが現状です。

今後は益々壮年の働きが必要になるので、年に1度くらいは折り合う・支え合う・語り合う時を活動の一つとして取り入れることを願っています。

++*+*+*+*



小樽教会でのチラシ折

「バプテストにおける伝道者養成」その5 (注1)

日本バプテスト連盟宣教研究所非常勤所員・恵泉バプテスト教会協力牧師 松見享子

バプテストとしては定まった「式文」を持つことはしませんが、実際には諸教会からの要望はあります。切実なのは無牧師教会からの声です。それこそ「バプテストだから主の晩餐式を信徒で執り行いたい、今までの牧師のやり方を見様見真似でやる、それだけいいの。学びの参考になるものがあれば助かる」という声はずっといただいていた。ですここで提案する「式文」は、教会が委託した人なら牧師に限らず誰もが使用できることを前提に、これを「たたき台」として、バプテストの礼拝ってなんだろう、バプテストで行われる式ってなんだろうと、教会みんなで考える、そんなツールにしていきたいのです。革表紙で金文字入りのカッコいい方が喜ばれるとは思いますが、皆さんのお手元には、あえて編集も可能なCD-ROMデータでお届けします (注2)。「宣研はこんな式順を提案しているけれど、私たちならこうする」と、自由に上書きしていただきたいので、わざわざ「あくまでもたたき台ですよ」ということが伝わる形で出すのです。「こういう式が考えられます」という結論だけではなく、例えば何でこの祈りはこの順序なのか、献金はこの順序なのか、ということについて考えるための視点やプロセスもご紹介します。皆さんも他の教会の礼拝に出たとき、式順などが違ってとまどったことはありませんか？でもその式順にも何らかの理由があるはずだし、もしも何の理由もないのなら、やっぱり考える必要があります。それをワイワイとみんなでしていくこと、「神学する」ことに、ぜひ取り組んでみていただきたいのです。何か目新しいプログラムをするのも良いかもしれませんが、毎週何気なく続けている礼拝の意味をみんなで真剣に考えること、そこからさらに豊かな教会形成が始まっていくと私たちは確信しています。

実はこれを作るまでには、とても時間がかかりました。そもそも礼拝とは何か、バプテストにおいて葬儀や結婚式、教会奉仕者の任命、牧師の就任式、献堂式などの諸式をどう捉えるか、そんな研究を10年以上やって、他の教派の式文なども参考にして、やっと今年こういうものを出すわけで、いくら「教会が神学をすることが大切だ」と言っても、それを一つの教会でやろうとしたら大変です。だから、そんな一つの教会でやるには負担も労力も大き過ぎる部分は協力伝道の枠組みの中で宣研が担わせていただいて、「神学する」ための材料として皆さんにお戻しするというわけです。中味を考えるのは、もちろん各教会が主体ですけれども、例えば連合内などでお互いに「あなたの教会ではどんな式をしていますか、それはどうしてですか」ということを聞いかけ合い、相互吟味するというのもまた「神学する」ことですね。そういう本当に自由な対話の場、変革の場というのが教会、あるいは連合や連盟の中に起こってくるということによって、一見遠回りに思えるかもしれませんが、やがて「神学する力」を養われた伝道者が起こされていく土台が作られていくのだと思います。

さて、こうやって考えてくると、「一人の伝道者を育てる」ことに関わる一連のプロセスも、教会が「神学する力」を得るまたとない機会だということに気づかれるでしょう。「そもそもバプテストの伝道者って？」ということから始まって、「神学校に行きたい」という人が起こされた時には、その献身の思いや召命観と一緒に吟味する。その人の神学校での学びを検証する。と言っても、上から目線で「君、こんなことも学んでいないのはダメじゃないか」というのではなくて、その学びで得た課題を共有することで、教会も共に問われ、共に学ぶ。あるいは一人の伝道者を招聘すること、それにまつわる色々なこともそうです。新しく牧師を迎える時、いわゆる「信徒」はどんな役割を担って、牧師にはそれ以外のどんな役割を委託するのかを改めて考える、これも「神学する」貴重な機会です。今ある教会の形や牧師職のイメージは変えないで、牧師の方が私たちに合わせてくださいというのでも、反対に、牧師の言うままに何もかもガラリと変えてしまうというのでもない。やはりその機会にも、必要があれば「お互い」が変わるのだという姿勢をもって、共に歩むのにふさわしい教会の形を探るために、牧師と信徒、そこに集う一人一人が共に神学していく、それが大事なのだろうと思います。一人の牧師が一つの教会の牧師となり、一つの教会が一人の牧師と歩む教会になるまでには、双方が学び、問われ、変わっていくことが必要で、それにはある程度の時間がかかるわけで、もしも本気でそれをするならば、わずか1年で牧師の去就についての結論を出すことなど到底できないでしょう。そして、牧師の働きの評価がなされるなら、同時に教会の側も評価されるべきでしょう。もちろん、引退も含め、一人の牧師が教会を去るという時には、教会としてそれをどう捉え、どう関わるのか、ということも教会が「神学する」またとない機会です。

こうして、ひとたび教会が自ら神学していこう、それは牧師や神学者だけのものではなく、バプテスト教会を形作る私たちみんなの大切な使命なのだと考えて、それをしようと思うならば、何も特別なことでなくても日々の地道な教会の営みの中でそれを行っていくことはできるし、そう言われてみれば、皆さんも既に無意識にやっていたな、ということに気づくかもしれません。だからむしろ大切なのは、それをどのように意識化するか、教会全体で広く共有するかです。そのことが「神学する教会」を作り上げ、そのような教会の働きに仕える「神学する伝道者」を育てるために重要な鍵なのだと思います。

最後に、このようにバプテスト教会にとっては、「神学し続ける」ことがどうしても欠かせないのですが、そうやって共に聖書に聞き、神さまについて考え続け、自分たちを絶対化せず、必要があれば適切に変えられ続けるということ、そのことを恵み、喜びとして語ること、実はそれは今日の私たちの伝道の大きなテーマでもあるのではないのでしょうか。☞<4頁に続きます>